# 「蓮如の『如』を問う」

長坂公一

## 一、誤解されたか、文言のいくつか。

蓮如さまの『お文』に出てくる「王法を本とする」は、今日、我々が蓮如さまに学ぼうとするとき、いささか気になる文言である。（三帖十三通、十二通、二帖一通、六通など）

> まずほかには王法を本とし、――国ところにあらば、守護地頭にむきては疎略なく、かぎりある年貢所当をつぶさに沙汰をいたし、そのほか仁義をもって本とし、また後生のためには、内心に阿弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて、――信じまいらせば、かならず真実の極楽浄土に往生すべし。　三帖十三通

さまざまに自由を奪われている門徒衆に対して、これらの文言は、さらに一層、自立力を奪い、王権への服従を強いる方向に、影響するかもしれないとは、想像に難くはない。その点については、蓮如さまご自身の「遺言」までも残っている。

> 一流の中に於ては、仏法を面（おもて）とすべき事、もちろんなり。しかれども、世間に順じて王法をまもる事は、仏法を立てんがためなり。しかるに仏法をば次にして、王法を本意と心得る事、当時これ多し。ただし、しかるべからざる次第なり。（遺言三十六）

「ただし、しかるべからざる次第なり」と、誤解をとくために遺言をなさっていたということは、それだけ誤解と得手勝手の迷信が、当時の社会にも広まっていたことの、証拠とも取れるであろう。これは、亡くなられる

十六日前に、五人のご子息が蓮如さまから直接に遺訓を受けられ、没後一ケ月目に、文章化されたもの。その「明応八年巳未四月廿五日」付けの古文書『蓮如上人御遺言』は、本泉寺に残っている。

さらにまた、『蓮如上人御一代記聞書』の「両刃の剣」の話題なども、同じ誤解の傍証になるかもしれない。

一、信もなくて、大事の聖教を所持の人は、おさなき者につるぎをもたせ候う様に思し召し候う。その故は、剣は重宝なれども、おさなき者、もち候らえば、手を切り、怪我をするなり。持ちて、能く候う人は、重宝になるなりと云々（二八三）

一、前々住上人、仰せられ候う。「ただいまなりとも、我、しねといわば、しぬる者は有るべく候うか、信をとる者はあるまじき」と、仰せられ候うと云々（二八四）

これは、〈主君に生命を預けて絶対服従する家来のような人は、多いようだけれども、自立し、誰とでも平等に共存しておれる信心の状態を、獲得しようとする人は、いないようだ〉、というほどの意味であろうか。

「後生の一大事」という文言も、「白骨のお文」（『お文』五帖十六通）などで、繰り返し使われた。「十人は十人ながら、百人は百人ながら」もらさず助けたいという阿弥陀如来のご本願も、救済の実をあげるのは、死後の冥土でのこと、そして、次回の人生が当てになるとなれば、現在の人生の間にどんな理不尽な目に会わされても、抵抗せず、諦めて、次回の人生に期待を寄せるようになるであろう。

蓮如さまは、「わかきとき、仏法はたしなめ」（『聞書』六三）、「仏法には、明日と申す事、あるまじく候う。仏法の事は、いそげ、いそげ」（同一〇三、一五五）と、おっしゃるのだから、「後生」は何も「死後の冥土」の意味ではなかったのかもしれないのに、聞くがわの門徒衆は誤解して、蓮如さまの思いもしなかった方向へと、脱線してしまったということか。

「仏恩報謝の念仏」「御恩報尽の念仏」も、しばしば言われた。『お文』五帖四通、十通など。実生活上の問題は何ひとつ解決しないでも、すでに阿弥陀様からみん

な助けられているのであり、あとは感謝と御恩返しの念仏をするだけしかない、という意味に受け取られる。この決まり文句を覚えた真宗門徒の大半は、当時以来あの第二次世界大戦にいたるまで、念仏に戦争回避の働きがあるなどとは、思いもしなかったのではないか。ましてや、徳川幕府の分断政策によって、真宗教団がお東とお西に分割されても、念仏に、それをはねかえす力を求めようとはせず、分裂をますます助長する方へ、分断支配を歓迎する方へ、我々門徒は今でも突っ走っているかのようである。念仏を振りかざしながら、なぜ我々は、浅く視野の狭い考え方に、縛られて行くのであろうか。

## 二、誤解の生じる原因を、言葉の領域に、探ってみる。

蓮如さまの詳しい歴史考証はさておき、それ以前に、私としては、現代の我々自身も、なぜ地獄状態におちるのか、と尋ねたい。また私自身、現在まで僧侶の生活の中で、「中興の祖」と呼ばれた蓮如さまの「中興」にも比べられる〈自分自身の再興ないしは復活〉を願わない日はないわけで、だから、私自身の復活にこだわりながら、蓮如さまのお言葉を聞いて行きたい。

私は部落解放運動との出会いのなかで、自分自身の僧侶としてのありようが、（一）寺檀制度で優遇された中流身分としてであれ、（二）触穢の仕事で賤視される雑賤民としてであれ、どちらに身を置いていてもなお、幾重にも厚い壁に封じ込められていて、開かれたひろい世界を知らなかった、ということに気付かされるようになった。そして、かつてなかったような新鮮な形で、起き上がり小法師や不退転の菩薩のテーマに、こだわることが始まった。「後生の一大事」の言葉も、〈後にひかえて連帯保証人となって生きる〉という意味でなら、現在の社会生活のなかでも、まんざら使えない言葉でもないかもしれない。私の死後、この地上に生まれるであろう一切衆生とも、連帯して行かなければならないという意味でなら、「死後の未来に生きる」という表現も、もちろん出来るかもしれないが。ただしその場合、冥土で三塗の河を渡り、閻魔さんの前で裁きをうけて、幸いにも助かるというような、「ご冥福」の話には、縛られないことになる。

蓮如さまは言われた、「そのかごを水につけよ」と。

> 一、人の、――「わがこころは、ただ、かごに水を入れ候うように、仏法の御座敷にては、ありがたく

もとうとくも存じ候うが、やがて、もとの心中になされ候う」と、申され候う所に、前々住上人、仰せられ候う。「そのかごを水につけよ」と。わが身をば法にひてて（漬）おくべきよし、仰せられ候う。万事、信なきによりてわろきなり。――」（『聞書』八十九）

「お座敷で聞いている間は、有り難いのですが、一歩外へ出ると、私の心は、水がもれて空っぽになる篭のようなもの。理解したはずの説法も忘れ、少しも身につきません。」と言う人に、蓮如さまは、「ならば毎日、朝から晩まで、お座敷で説法に漬かっていなさい」とは、応じなかったのではないか。どっぷり漬かるだけで効果があるのは、流行が身につく場合なども、そうであろう。しかし、流行に染まって身に付くものは、流行でしかなく、長続きしない。不退転を求めようとする仏教徒を相手に、蓮如さまが、流行のレベルで、湯水をあびるが如く説教を聞けよと勧められた、とは考えにくい。むしろ、お座敷談義を一歩抜け出した現実の、それまでは避けて見過ごしていたような領域を、「法の水」と呼んでおられたと、解釈してみてはどうか。そこに身を漬けなければ、阿弥陀仏の法が身につくことはないと云えるような、そういう領域に、身を乗り出せ、という含みを、蓮如さまのお言葉に聞いてみてはどうか。

私は、国家社会のさまざまな組織や派閥から、排除されてきたいわゆる被差別民の、差別をはねかえして生きるバイタリティの凄さに、しばしば感動させられてきた。これは、部落解放共闘会議などの運動に参加して、始めて肌身にしみて味わえたことでもあった。四門出遊で荒野の人々に接して問題に目覚められた釈尊や、流罪の地で社会から排除された人々に逢われた親鸞さまの場合と同じように、蓮如さまも、「法の水にひたる」とは、開かれた外気に身をさらすことであると、分かっておられたのではなかろうか。

「両刃の剣」の喩に戻ろう。「守護地頭に逆らうのは要注意」くらいのことは、不退転の道を進もうと歩き出した者なら、始終体験することであろう。「要注意ならば絶対服従する」というふうに、すぐに真反対のがわへ跳んでしまったのでは、不退転の道はひらけない。ふつう我々は、極端から極端へ跳び移りやすい。「主君のためなら、死ねといわれれば、死ぬ」というところまで突っ走る。「両刃の剣で手を怪我する。」

平素われわれは、切れ味のいい言葉をつかい、ものご

とを何でも、有る無し、勝ち負け、損得、善悪、強弱、美醜などのように、二つの価値で切り分けながら、暮らしている。そうしているうちに、割り切れない状態や、微妙な状態に親しむ余裕を、失ってしまうのではなかろうか。「逆らいもしないが、服従もしない、遠ざかりもしない」というような、ゆったりとした態度に出ることができなくなる。我々の生活言語の数々をふりかえってみると、その大半が「両刃の剣」になっている。

私は、沖縄戦のフィルム「ドキュメント沖縄」を見て、「最も弱い人々に、最も過酷な二者択一が迫られる」というセリフに出会った。また、こんなセリフを聞いた。「強者はいやがうえにも強く、弱者はどこまも弱くなるのが戦争の論理だ。」また、最近では、ペルー大使館でのテロ事件でも、テロリストたちが武器を捨てて降伏したあと、虐殺されたことが、問題になった。「戦争の論理」という言葉で、人間が地獄模様を繰り広げる衝動の法則、その過激な二者択一の暴風が、端的に表現されていた。そこでは、中庸さが欠けている。引き分けとか、多様さ、あいまいさとかは、許されない。勝つか、さもなければ死ね、である。蓮如さまの時代もまた、戦乱につぐ戦乱、無抵抗の老人や女性や子供が、片端から殺されていった時代であった。

私としては、蓮如さまの文言の、歪められた解釈が世にひろまったことについては、二者択一に突っ走る二値論的なものの考え方が、その要因の一つになっていた、と考えたい。両極端を重視するわりには中程を軽視したり無視したりする傾向の強い考え方を、いまは「二値論的考え方」と呼び、そして、中程を両極と同等に、対等に重んじる考え方を、「三値論的ないし多値論的考え方」と呼ぶことにする。

私は、「両刃の剣」にならない言葉、とくに微妙な意味の言葉の「如」「蓮如の如」に注目する。言葉「如」によって、中庸さや多様性を認める立場での、微妙なものの考え方、言い換えれば、三値論的、多値論的考え方が、受け入れられる場合には、蓮如さまの訴えたかった意味内容も、なお一層ちゃんと受け取れるのではないであろうか。蓮如さまは、聖教『歎異抄』までもが、両刃の剣になって、使う人自身の手を傷付けるばあいがあると、警戒しておられた。ということは、『歎異抄』を、弱々しい素人ではなく、強い専門家だけが読めばいい、という意味ではなかったはずで、そうではなくて、弱々しい素人であれば、そのままで、別に強い専門家になる必要はなくて、ただ信心を持って、この聖教に近づくこ

とだ、という意味であろう。文字もしらぬ田舎の女性たちであっても、善悪、損得、勝負などを一刀両断に、切れ味よく切り分けるような言葉の習性にしばられずに、「のような」とか「かもしれぬ」とかの、微妙な意味の言葉を使いながら、心にゆとりを持てるようになっているなら、遠慮なく聴聞すればいい、という意味のものであったのではなかろうか。

そのような予測をたてながら、以下に少しばかり、蓮如さまのお言葉を拾って、吟味してみたい。

## 三、微妙を意味する言葉「如」の分布状況をめぐって。

福井県の門徒衆十人ばかりと話し合う機会があった。京都の東本願寺から吉崎御坊まで毎年、蓮如さまゆかりのお篭が往復する。お篭を担ぐ常連のお同行も中にはいた。蓮如さまには格別の親近感を抱いている人々であった。私は問うてみた。「蓮如の「如」の字を、どう味わってきたのか。」と。彼らはキョトンとして、「そのような話題は聞いたことがない。」と答えた。また、広島では、西本願寺派の僧侶に質問してみた。彼は、「蓮如の「如」ですか。「如」はもったいなくて、論議の対象にしたことがなくて。」と、口ごもってしまった。

いま私の手元に、真宗十派の代表者の名簿がある。親鸞さまを第一世として第二十九世までの延べ二百二十一人のうち、法名に「如」の字があるのは、六十二人。四人に一人以上の割合である。法蔵館版・大谷大学編『真宗年表』に載っている。また、真宗大谷派出版部版・大谷大学編『大谷嫡流実記』をみると、親鸞さまの孫の如信から蓮如さまの孫の如覚までだけでも、女性も幼児もふくめて、二十八人の名前に、この場合は、法名であったり俗名であったりいろいろだが、「如」の字がついている。一世代に三人の割合になる。蓮如さまの直接のお家族は、お子たちが二十七人いて、その産みの母は、五人。合わせて三十二人。その内、八人の名前に「如」がついている。四人に一人の割合である。なぜ、こんなにまで、「如」の字を名前に入れたがるのか。むろん、それを問う前に、「如」を伝承して下さった御苦労に対して感謝することを、忘れていてはなるまいが。

私の寺の過去帳には、約三百年間にわたって死者の法名が記録されているが、「如」の字をもつ法名は、死産児の「如露」が一つ見つかった以外は皆無である。貴族化し、支配階級に成り上がった大谷家が、「如」の文字

を独占し、一般門信徒の法名は、お上へのご遠慮もあって、「如」の字は使わない慣例ができていた、とかの風聞もある。「如」は、不退転の道を切り開く歩みのなかで使えば、効果を発揮する貴重な切り札になり得たかもしもないのに、それを、一般門信徒は、遠慮して使わなかったかのようである。

経済の二重構造ということが云われるが、構造的に厚い壁でもって、上層の支配階級と下層の被支配階級に分けられているとき、下層階級の側は、ばらばらに分断され、競争させられ、急き立てられることで、ますます弱く、無気力になっていく。ならば、それよりも、急がず、お互いの間の勝負にはこだわらず、つまり、「如」の心で引き分けてゆくと、案外のところで連帯ができて、下層階級そのものが強くなり、上層階級に対抗できるようになるかもしれない。もしそうであったとしたら、蓮如さまの時代、その下層階級に「如」は普及していたか、と問いたくなる。しかし、言葉「如」は、結局は、上層階級に組み込まれた本願寺の大谷家の家族の中だけで活用され、下層階級として厚い壁で隔てられていた一般門徒の間へは、十分に普及して行かなかったがために、社会問題の解決、特に経済の二重構造や分断支配の壁を破る方向には働かず、むしろ、いよいよ壁を厚くするほうへ、働いてしまったのかもしれない。

「如」は、諸橋徹次『大漢和辞典』によれば、㈠らしい、ようだ（近似をあらわす意味）、㈡おなじい、ひとしい（同一をあらわす意味）、㈢（仏教用語では）思慮分別を加えない、あるがままのすがた。

仏教用語の場合の意味を受け取るには、意味㈠と、意味㈡を、二値論的に極端にわけてとりあげるとすれば、次の二通りが出来てくるのではないか。すなわち「思慮分別を加えない、あるがままのすがた」とは、

㈠「如」は、あいまい言葉である。絶対的な真・善・美などを振りかざす必要はないと、あいまいに構えると同時に、自分の私利私欲を顧みて自覚することも、あいまいにしておきながら、自分たちの当座の都合にあわせながら、要領よく権力を保持してゆく、いわゆる特権階級の人々が、着目する「如」。それは、彼等が、自分たちの領土を統率するためにシンボルとして祭り上げる「神仏」の内実にもなるであろう。下級職員には許されないあいまいな答弁が、上級管理職では公然と許され、「思慮分別を加えない、あるがままのすがた」の振る舞いだと、誉めら

れたりするのも、この一例か。

㈡「如」は、同じ、等しいの意味の言葉である。「如説に修行」（説かれてある通りに忠実に修行する）のような用例もある。この場合、（思慮分別を加えないとは）見ざる言わざる聞かざるに徹して、何も知らずに絶対服従すべき権威者が、「如」。「――「如」は、もったいなくて、議論の対象にしたことはない」と言った人があったが、うなずく人も少なくないであろう。この場合、「如」は、下層階級の人々を永久支配するに有効な、崇拝の対象にもなり得るであろう。

以上の㈠㈡は、二値論的に分けて考える癖のつよい人たちがおちいりやすい、歪んだ解釈の例と言えるのではなかろうか。

これに対して、わたしはもうひとつ㈢として、三値論的に考えて、もっと微妙な意味に受け取ることを、提案してみたい。すなわち、「思慮分別を加えない、あるがままのすがた」とは、「上下、善悪、損得などの反対対立の言葉だけで他人と衝突しながら自己表現するのではない。むしろ、中間、とんとん、引き分けなどを重視して、それらをお互いのあるがままのすがたとする」というふうに。そうなると、「如」は、いろんな階層や立場の人々が微妙な意味（のような、かもしれない、など）の言葉として使い、お互いに衝突することなく、どこからでも自由に見たり聞いたり話したりが出来る。そして、だれも、露骨に決めつけたりしないから、お互いのあるがままが尊重される。「如」をフルに活用することを、お互いに共通のパスポートにすることで、全ての人々が平和裡に共存し交流できる。そういう広場ないしはパスポートに相当する言葉として、「如」は使われているのではなかろうか。

さて、それなら、蓮如さまの場合はどうであろうか。

> 一、蓮如上人、おりおり、仰せられ候う。――「仏法だにもあらば、上下をいわずとうべし。仏法は、しりそうもなきものがしるぞ」と、仰せられ候うと云々　『聞書』（一六七）

ここで、蓮如さまのおっしゃりたかったことは、つぎのように、言い換えられるのではなかろうか。

〈釈尊は、四門を出、荒野の人々の間に遊ばれたとき、世間の常識で言うような（上下をいわず）にではなくて、ということは、中位を軽視して上位と下位ばかりに

こだわる二値論的な考え方のままで、〈上位にも下位にも手当たり次第に〉という意味での（上下をいわず）にではなくて、したがって、また、（しりそうもなき下位のものがしるぞ）という答えに向かうのではなくて、

むしろそれよりは、（仏法だにもあらば）と問いながら、国の中では、上位と下位だけでなく中位にも目を向け、国の外では、荒野の人々にも目を向け、さまざまな角度から見るいわば三値論的、多値論的なものの考え方で、仏法を尋ねて行った。

そうしたら、思いもかけず荒野の人々から、教わることが多かった。だから、（仏法は、しりそうもなき荒野の人々がしるぞ）と、おどろかれた〉と。

私たちの寺では、お経を拡大コピーして、毎朝、お同行と一緒に朗読している。一字の大きさが一センチ角もあるので読みやすい。漢文を延べ書きの日本語に改めたものも、用いている。伝統的な章分け、節分け、句分けをし、それぞれについている見出し語も、現代語訳して、論旨を把握しやすくした。本山も大学も、そこまでのサービスはしてくれていない。私どもは素人の寄り合いだから、コピー機を使って素人向けのパンフレットを次々とつくった。これは、お経を理解するのに役立つと、僧侶の私自身も実感し、少々得意にもなっていた。

ところが、ふと気付いてみると、朝事参りのお同行の、八十才あまりのお婆さんが一人、休みがちになっていた。彼女は、学校へ行けなかった人であった。漢文の『正信偈』ならば、大声で歌っていたのだが、現代語訳を読むとなると、読めない。隣のお同行はそれに気付いたが、「読めなくても、本を開けて読む真似をするだけでも、しないよりはまし」と思い、見て見ぬふりをしていたという。たまたま私は、町内の部落解放同盟支部で、識字学級が開かれているのを耳にした。八十何才のお婆さんの識字学習が、私の寺でも課題となった。お婆さんがふたたび寺の朝事に顔を見せるようになった時、私は機を逃さず、「如」の一字を取り上げた。『大無量壽経』上巻に、「如来」が十三回、「如」が四十一回、下巻には、「如来」が六回、「如」の字は、三十数回出てくる。赤マジックでその文字をかこんだパンフレットを、皆に配った。黒板には大きく「女」と「口」を並べて書いた。そして、その「如」の意味は、「のような」「かもしれない」など。この文字の出てくる個所は、『大無量壽経』下巻の中で、とくに大事な個所であることも、説明した。私たちの寺の朝事は、そのお婆さんとともに、僧侶もほかのお同行も、「如」の文字に注目しようとうなずきあうことから、再出発することになった。もちろん、手探

りでなのだけれども。

『大無量壽経』下巻の「聖衆の功徳（衆生に元々から備わっていた仏徳）」段の終わりごろに、「法説広嘆」という見出しのついた、一頁ばかりの小節がある。「法説広嘆」は、〈説法〉ではなくて〈法説〉だから、〈釈尊ではなく、法そのものが語りかけてくる〉という意味であるらしい。江戸時代の宗学者・易行院釈法海の作った科文にすでに出てくる見出し語である。この一節は、阿弥陀如来ご自身が語りかけてこられたもの、と受け取られるというのだから、これは、非常に重要な指摘であろう。その重要な個所に、「如」の字が三つもでてくる。「如より来生して、法の如如を悟り」と。つまり、〈阿弥陀如来の国では「法は如如である」〉と示されてあるわけで、これによっても私たちは、「如」に注目せざるを得ないであろう。

親鸞さまの『和讃』には、「一如に乗る」ということが、歌われてある。

十方三世の無量慧
同じく一如に乗じてぞ
二智円満道平等

摂化随縁不思議なり
（『讃阿弥陀仏偈和讃』四十五）

十方の国々から異なった智慧をもった人々が、それも過去世代の高齢者はもちろん、現世代の中年の者、未来世代の幼少の者までも、無数に寄り集まって来て、衝突を繰り返している国際化時代の世上が目に浮かぶ。その異なった智慧の数々も、どれかの二つが衝突するのでなく、まずどれもが「一如」の上にそれぞれ乗せられると、二つの智慧が衝突せず円満に両立、共存できるように、間を取ることが出来る。「同じく一如に乗じてぞ、二智、円満」と、歌われてある。そうなると、「道」、つまり、通じ合えるということが成り立つ。平等に通じあえるから、「道平等」。ご縁のある者みんなが全て、ご縁に従って迎えられ、衝突しないように変えられる。つまり「摂化随縁」せられる。不思議である。

このように親鸞聖人の場合も、「如」という言葉の〈衝突を避ける効力〉には、強い関心が寄せられていた。

広島県の家庭で聞かれる幼児語の「マンマン・アン」は、南無・南無・阿弥陀」の訛ったものともいえようが、北陸各県には、「のんの、ののさま」と教える風習があるようだ。「のんの」は、「のの」から、「のの」は「にょ

にょ」からと見られている。だから地方によっては、「如来」の呼び名が生活に染みとおり、幼児語にまでなっている場合もあるのであろう。また、これを、浄土真宗の広まる間に、「如」の字がかなり重んじられていたことへの証左とみてもいいかもしれない。蓮如さまは、『歎異抄』さえも「両刃の剣」になる、とおっしゃったが、「如」の方は、もし幼い者が手にしたとしても、怪我はしないですむのかもしれない。

そこで、蓮如の『お文』の中で、「如来」の分布状態をざっと見てみた。

「ほとけ」「ぶつ（仏）」「にょらい（如来）」の使用頻度を比較してみると、全部で三百八十回も出てくる呼称のうち、「ほとけ」は、三％以下。「仏」とも「如来」とも言わない略語「阿弥陀」「弥陀」が（一〇五回で）、廿七％強。「仏」のつく「阿弥陀仏」「弥陀仏」「無量壽仏」「仏」は（七七回で）、二十一％強。「如来」のついた言い方「弥陀如来」「阿弥陀如来」「如来」は（一七七回で）、四十七％。

つまり、蓮如さまの『お文』では、「仏」よりも「如来」のほうが二倍近い比率で、より多く使われている。なお、「ほとけ」という言い方は、親鸞聖人のばあいも『御和讃』にその傾向が見られるように、真宗用語としては好まれなかったらしいことも、察せられる。

## 四、価値の多様性を認める立場にあると思われ、注目されるもの。

蓮如さまが、「如」の文字の、〈微妙〉をあらわす側面を、意識的に問題として論じておられたという、資料を私はまだはっきりとは、上げることができない。だから、ここでは、蓮如さまのお言葉のなかから、私の関心事、「二者択一の二値論か、中間を尊重する三値論か」と問う、リトマス試験紙（この試問の仕方自体が二者択一になることには用心したい）に反応すると思われる、気になるものを、拾ってみる。

三値論的に、中道を開こうとする立場に立っていると思われるもの。

一、仰せに、「一念発起の時、往生は決定なり。つみけしてたすけたまわんとも、つみけさずしてたすけたまわんとも、弥陀如来の御はからいなり。つみの沙汰は、無益なり。たのむ衆生を本にたすけたま

うことなり」と仰せ候うなり。（『聞書』三八）

三途の河の向こうで「つみの沙汰」をする閻魔大王は、人の罪科の軽量を判定、批評するだけで、地獄行きの人までも助ける身許引受人になってくれるわけではない。しかし、阿弥陀如来の浄土は、いかなる困難にも耐えて、十人は十人ながら百人は百人ながら、漏らさず助けたいという願いのもとに、築き上げられる国である。その国を築く仕事に参加しないかと、阿弥陀如来は呼びかけて来られる。「行きます」と決意するのが、「一念発起。」婚約の決心に、結婚生活全般について連帯保証人になれる覚悟が含まれているのと、よく似ている。「一念発起」の中に、浄土建設事業全般への連帯保証人になる覚悟が含まれている。だから決心と同時に、その国のメンバーになれるから、「往生は決定なり。」「罪の沙汰は無益。」冥土も、三途の河も、閻魔大王も無用。

罪深く見られがちであった女性など、社会から差別され排除されていた人々の問題が、関係してこよう。それらの人々は、みな、不当な扱いをうけていたけれども、釈尊や親鸞聖人は、逆に、それらの人々から、呼びかけられ、目覚まされ、「一念発起」の信心に、出会われた。それを思うと、蓮如さまもまた、それらの人々を念頭において、二者択一をせず、「つみの沙汰、無益なり」と、おっしゃったのではなかろうか。

一、一心とは、弥陀をたのめば、如来の仏心と一つになしたまうがゆえに、一心というなり。（『聞書』一六一）

これを解釈すると、「如来の」は、「如来が」と主語に訳すのが適切であろう。天親菩薩の『浄土論』などで、「一心」という言葉が使われているが、阿弥陀仏と連帯しようと思い立つ人の心を、阿弥陀仏の心と一つになるようにし向けて下さるのは、如来である。その意味で「一心」という言葉は使われて来た、という主旨か。

阿弥陀仏が「来たれ」と呼びかけ、衆生が「はい」と応えてそこへゆくという、その呼応関係を成り立たせるのが「如来」の働きであるという含みを、ここでは読むことができる。

ここでは、「如来」の如が、人間関係の間の厚い壁をやぶり窓をひらく効能を持つと、暗黙の了解があるかのような、文章になっている。興味深い文章と云わねばなるまい。

一、蓮如上人、御病中の時、仰せられ候う。「御自身、何事も思し食しのこさるること、なし。思い召すことの、ならぬことは、なきなり。それにつきて、御往生あるとも、御身は、思し召しのこさるる事、なし。ただ、ご兄弟中、そのほか、誰にも、信のなきを、かなしく思し召し候う。世間には、よみじ（黄泉路）のさわりということあり。我においては、往生すとも、それなし。ただ、信のなき事、これを歎き思し召し候う」由、仰せられ候いき。（『聞書』二一一）

それおもんみれば、人間はただ電光朝露の、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。――まことに、死せんときは、――妻子も、財宝も、わが身にはひとつもあいそうことあるべからず。されば、死出の山路のすえ、三途の大河をば、ただひとりこそゆきなんずれ。これによりて、ただふかくねがうべきは後生なり、またたのむべきは弥陀如来なり、信心決定してまいるべきは安養の浄土なりと、おもうべきなり。――（『お文』一帖十一通）

「よみじのさわり」とは、生存中に蒔いた種が、死後の旅路のつまづきの芽となる、という俗説のことか。蓮如さまも、「世間には」と、但し書きしておられる。世間の通説にある冥土の旅路の情景を、蓮如さまはためらいもなく引用なさる。

もちろん、しかし、真宗では、「即得往生」で、念仏の信心を得た人は、直接に阿弥陀仏の浄土へ往くのだから（『お文』一帖五通にもあるように、「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」なのだから）、よみじ（黄泉路）の旅は無用であろう。蓮如さまも、信心は、冥土への土産ではないと、はっきり区別しておられる。

今日でも葬式のとき、弔辞や弔電に、そして電話帳の例文欄にも、「ご冥福を祈る」などと云う文例が出てきて、違和感をおぼえたりするが、蓮如さまの時代にも、冥土の旅を思い描く人々は多かったにちがいない。一人の死者を、未決囚のように見たてて、いずれ閻魔さんの審判を受ける時には、ぜひ幸福な判決、極楽行き、を受けられるように、と前もって祈ってあげたい、というのが、「ご冥福を祈る」人たちの思いであろうか。ところが、阿弥陀如来は摂取不捨、どんな人をも浄土へ迎え入れたいと願い、呼び招いておられるのだから、だれでもが、閻魔さんの審判は無用、自分で「はい」と答えるだ

けで、直ちに浄土へ往く。だから、故人の遺言は、「先に行って待ってるよ。あなたも迷わずに来なさいね。」そして遺族からの見送りの言葉は、「先に行って待ってて。私もきっと行くから。」となる。

阿弥陀仏の浄土がわかった人は、迷わず浄土へ直行する。仏法僧の三宝に帰依する言葉にも、「みずから仏に帰依したてまつる」とあって、自分できめて、自分で往く。権威者による資格審査は必要ではない。自分で行く気になって、今あるがままの姿で行く。

親鸞聖人の『教行信証』巻末にも、「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は、前を訪え。」とあり、浄土での「待ちつ待たれつ」の関係を、自分で決めるのが、真宗念仏者の特権。そういうことになっている。

そこで、蓮如さまのお言葉を、解読してみよう。「私は、世間にいう「よみじ（黄泉路）」とやらへは行かない。直接に阿弥陀仏の浄土へ往く。そして兄弟たちの来るのを待つ。ただ、心配なのは、兄弟たちが阿弥陀仏の本願についての信心が十分でないらしく、自分で往生極楽を決めかねて、閻魔さんのような世間的権威者から評価・審判を受けて、出処進退を決めるかのような、自立性のとぼしい言動が目に付く。六道輪廻に陥る危険性がある。」そのように、蓮如さまは、心配し、そして、「待っている、迷わず来いよ。」という意味で、「悲しい」とおっしゃったのであろう。

> 一、一心にたのみ奉る機は、如来の、よくしろしめすなり。弥陀の、ただ、しろしめすように、心中をもつべし。冥加をおそろしく存ずべきことにて候う、との義に候う。（『聞書』八四）

「冥加」という言葉が、気にかかるところである。「冥土」とか、「冥加」とかの言葉は、寺院育ちの私などは、幼いころから耳に聞きなれてきた言葉ではあるが、「冥」は、暗いという意味の言葉である。いまは、「我々の知りえないところで仏のご加護をいただいていること」への、へりくだった感謝の心を、取り上げている。

念仏の真宗では、「神様だけがご存じ」というような、こちらは知らないけれども向こう様は全部お見通しだというような、上下の差異は立てないはずである。仏仏想念ともいって、神様とちがい、仏さまの場合は、知見は一方だけのものではないはずである。仏が私の心の底を見透かしておられるなら、その時は同時に、私も仏さまのお心の底を知ることができる。しかし、冥加という言葉の場合は、そこが違う。この言葉は、仏さまのお心は、

人間の側からは伺い知りようもないが、仏さまの側では私たち人間の心を、底の底まで見抜いていてくださる、という一方通行の考え方の言葉であろう。相互交流になっていない。だからこれは、仏教には馴染まない要注意の言葉であろう。だが、蓮如さまは、そこまで警戒してはおられないかのようである。神も仏も同じレベルで語られているらしい。これは、蓮如さまの、通俗なところ、世間に妥協なされたところと、見ることもできるかもしれない。

一、同じく仰せに、「まことに、一人なりとも信をとるべきならば、身を捨てよ。それは、すたらぬ」と、仰せられ候う。（『聞書』一一五）

「身を捨てよ」というが、死ねば得られるが、死ななければ得られないというような、「二者択一的な捨身」を言っているのではないらしい。「それはすたらぬ」と、補足して断ってある。「十人は十人ながら、百人は百人ながら」一人の犠牲も出さないで、みんなが助かる道を見つけるのが、阿弥陀如来の本願である。本人は身を乗り出すであろうが、周囲が捨てさせぬという、助け合う関係になっていると見るべきであろう。さらに言えば、「それはすたらぬ」と信じ合って捨て身で働く間柄が、阿弥陀如来の浄土社会でもあろう。仏教の捨身は、犠牲の宗教の捨身とは、異なるのを、考慮しなければならないであろう。

蓮如さまの考え方の主軸と、強調することもゆるされようか。（同三九番もみよ）

一、「総別、人にはおとるまじき、と思う心あり。此の心にて、世間には、物もし、ならうなり。仏法には、無我にて候ううえは、人にまけて信をとるべきなり。理をまげて情をおるこそ、仏の御慈悲なり」と、仰せられ候う。（『聞書』一六〇）

「負けて信を取る」は、二者択一の「負けるが勝ち」とは違って、第三の選択枝を取っている。

## 五、むすび、二値論的な融和主義には、ひっかからないようにしたいもの。

先に引用した文章を、もう一度読んでみよう。

一、蓮如上人、おりおり、仰せられ候う。――「仏法

だにもあらば、上下をいわずとうべし。仏法は、しりそうもなきものがしるぞ」と、仰せられ候うと云々　『聞書』（一六七）

自分は上位と思っている人が、下位に見える人に手をさしのべ、引き上げてやる、その小さな親切が大きなおせっかいになるのは、融和的な対応策でしかなく、仏法にはなじまないものであろう。

なぜ、小さな親切が大きなおせっかいになることが起こるのか。これは、経済で説明すると、金持ちが、自分の地位の保全のために必要なだけは先取りしておいて、残りを他の大勢に分配することに決めている時に、起こるといえようか。雲の上の人々と、底敷のまだ下の人々を、置き忘れたままで、上下が固定するように仕組まれた社会では、連帯せずに飼い慣らすために、手をさしのべることが、当り前になってしまう。

連帯を欠いたおせっかいの欺瞞にひっかからないようにしたいもの。では、何故ひっかかるのか。慌てるからではなかろうか。急ぎすぎるからではなかろうか。三値論的に、中庸に重きを置いて考えるようにしていると、少しはスピード・ダウンするから、左右がよく見えるようになり、雲の上、底敷きの下を分けた厚い壁も、目に入るようになるかもしれない。厚い隔ての壁が破れ、そこに連帯が成り立つのでなければ、それまでは、「あるがままのすがた」での共存共栄は成り立たない。それを悟っていて助け合うのでなければ、仏法にはならないであろう。

蓮如さまとともに、「融和主義は、中庸を軽んじる二値論的な考え方から生まれる偏見の一つ」というふうに、批判的に見ていくことにしてはどうか、と私は思っている。

結論としては、親鸞様の『正像末和讃』五十八首目を、引いておきたい。人間の言葉の領域全体が抱える問題を、仏語的人語「如来」にまでなって心配してくださっているのが、人語的仏語「南無阿弥陀仏」であろうかと。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきてもし謝すべし